



息づく伝統

うきの伝統工芸

新型コロナの影響で、歴史ある祭りや行事は今年も相次いで中止に。伝統文化や工芸に触れる機会が減る中、このコーナーでは、市を代表する工芸品を写真でお届けします。手仕事の繊細な魅力をのぞいてみましょう。

花莫産

花莫産 施設として初の指定を受けた障がい者支援施設「清香園」。個人の適性に応じて染色や仕上げを手作業で行う。イ草班の担当者、麦田淳也さんは「培ってきた土台を大切に、コースターやホウキなど生活に溶け込む物づくりを利用者さんとしていきたい。」と話す。

小代焼 国の伝統的工芸品の指定も受ける小代焼。小代焼松橋窯の長木實さんは400年続く伝統を現在の暮らしに映し出してきた。「この道50年以上。求められるものを作り続け、作風も変わってきましたね。楽しく使ってもらえる物を作りたいです。」

熊本市伝統的工芸品 県指定の熊本を代表する工芸品。30年以上の歴史があり、伝統的な技法で作られていることなどが条件。市内では小川颯が1979年に初登録。延べ12品目が指定を受けた。現在は、太鼓、花莫産、屋根装飾瓦細工・飾り瓦、小代焼、番匠笠。

(H30.3月現在)

消せない灯

古くから職人たちの手によって継承されてきた工芸品。職人の技術や想いが受け継がれた姿には、暮らしに合わせた「美」が見出され、愛されることで、時代とともに少しずつ形を変えながら生活の一部として根を下ろしてきた。

しかし、技術の粋を集め時間を費やして作られたものであるほど、機械化による大量生産に押され、その多くが衰退。後継者不足も影響し、熊本市伝統的工芸品に指定される市内の工芸品はこの10年ほどで半減。今では5品となった。

伝統に新たな息吹を

「伝統を残しつつ、時代の変化に対応した鬼瓦を世界へ発信していきたい。」

そう話すのは、鬼瓦制作や文化財の復元を手掛ける藤本修悟さん33歳。幼い頃からの憧れだった飲食店経営の夢をかなえながらも、祖父や父の背中を追うように25歳で鬼師の道へと進んだ。

「作り手の意志で形は変わります。『好きこそものの上手なれ』というように、まずは好きになることから始めました。」

「復元では300年前の瓦と向き合い技を学びます。瓦素材を使った新たな商品の開発などには自由な発想も求められます。想うままに作ると駄作になることも多いけれど、一つでもいいから極めたいですね。伝統と革新のどちらも大切にしながら、知恵を絞っていききたいです。」

この日は、来年の干支にちなんだ寅の鬼面を創作。手やへら、筆を使って、作品の背景や届けたい心情を細部にまで表現する。古と今の両面を見せる鬼面は、大きな舌を出しこちらを見て笑っている――。

時代とともに

「市内の職人や作家さんの情報発信のお手伝いができるギャラリーの準備を始めました。」と現代に息づく工芸品のすそ野を広げる藤本さん。時代の流れに沿いながら、受け継がれてきた伝統を守り続けていく。鬼瓦に新たな命を吹き込むように――。